

重たい靴も今だけは軽い。

今日のためにおろした黒い厚底で、バスのステップを踏みしめる。少し揺れたバスは、けれど次に乗ってきた背の高いお兄さんが乗り込んできたことで尚の事傾いた。

（わ、あぶな……安い四列シートだからなあ。でも今は、そんなのどうでもいいくらい、楽しみ……！）

今から楽しみすぎてドキドキする。

ちよつとでもグッズを多く買いたくて、チケットが当たってからというもの、ずっと節約して過ごしてきた。

全ては明日のライブのため。

私の推し——実力派としか言いようのない歌声と天性のカリスマを持ち、飛ぶ鳥を落とす勢いでファンを増やし続けている歌い手「Leo」の、ライブのためだ。



ろこもこうみち

絢辻 透

夜行バスの出発前は、いつも言い知れない高揚と仄暗さを感じる。

パーソナルスペースなどまるで関係ないような窮屈な空間で、それでも各々が目的地への楽しみを抱えて過ごしているような。

ぼんやりとそんなことを考えながら座ったところで、後ろから来ていたお兄さんが、少し迷うようにスマホと私の隣の席を見ているのに気が付いた。

（すごいイケメン……夜行バス乗り慣れてなさそう、席迷ってる……？　って、うわ、目合った）

薄暗いバスの中で思い切り目が合ってしまった。

お兄さんは助かったとでも言うように眉尻を下げたあと、囁き声で声をかけてきた。

「すいません、夜行バス初めてで、席がよくわかんなくて。あのー……この番号って、お姉さんの隣で合ってますか」

「あ……はい、そうです。隣ですね」

見せられたスマホの画面に表示されていたのは、私の席の隣の番号だった。

頷きながらちらりと盗み見る。ワインレッドのインナーカラーが入った、長い襟足の髪を後ろでハーフアップにしているようだ。

柔和に「ありがとうございます」と笑いかける顔はアイドルのように整っているがどこか軽薄で、目尻のまつ毛がやたらと長い。ピアスもアクセサリーもたくさんついていて、これから夜行バスに乗ります、という雰囲気はあまりしない。

(……なんかホストみたい。失礼だけど、女慣れしてます、って感じ……というか、でかいお兄さんが隣なのちよつとやだな……)

格好良いお兄さんがいたところで、ここは夜行バスで、私はこれからLeOのライブに行くのだ。

誰が隣であろうと関係はない。むしろ窮屈だから小さめな人がよかったなあ、と失礼ながら思っている、また囁き声が聞こえてきた。

「ごめんね、オレでかくて。できるだけ通路寄るんで」
「えっ、あ……いい、いえ。大丈夫ですよ」

心の声が届いてしまったのかと焦る。

慌てて首を振るとお兄さんは安心したようにふつと息を漏らしていた。
ほのかに爽やかな香水の匂いがする。嫌な匂いじゃないし、氣遣ってくれる人なのはラッキーだったかも——なんて思いながらお兄さんの鞆を見ていたら、少し開いたチャックからちらりと、あるものが見えた。

「——え。待ってください、それ、Leoくんのグッズですよね」
「ん、えっ？ あっ……これ？」

「あ、すみません、見えちゃって……これめっちゃくちや初期のグッズですよ。販売して即売り切れたやつ……うわ、いいな……」

Lのロゴだけが印字されたシンプルなアクリルキーホルダー。
買えなかったグッズを見かけて思わず私は身を乗り出した。夜行バスで

なかったらなんとか譲ってもらえないか交渉していたところだ。

お兄さんは驚いた様子だったけれど、鞆を覗いたわたしを邪険にすることもなく、狭い夜行バスで声が響かないよう少し屈んでくれた。

「あー……えっと。お姉さん、その……Leo、好きなの？」

「はい、明日のライブ行くんです。お兄さんもこれからライブ行かれるんですか」

「……うん、そう。あ、キーホルダーはたまたま知り合いから貰ったグッズなんだけど……」

「え。すご、担降りの人からとかですか。これ今中古サイトでも出てないんですよ、5000円でも即売れるんじゃないや……」

「えっ、そうなんだ!？」

ひそひそ声だけれど本当にびっくりしているようだ。

Leoくんは男性ファンがつくようになったのは、最近、仲の良い歌い手の友達「Tiga」くんと共にゲーム配信をしはじめてからなので、恐らくそのあたりからのファンなのだろう。

幅の広い二重の目を瞬かせているお兄さんに、私は少し得意になってしまつて、当時のLeoくんの話をした。

「活動初期でお金なかつたと思うんですけど、要望があつたのでぐっグズ出してくれたんですね。私も当時から要望送つたので、すごく嬉しくて……まさか今まで再販しないと思わなかつたので、このロゴだけのは後回しにしちやつて……後悔してたんですよ。再販してくれないかなー……」

「そう、だつたんだ……」

我ながら早口オタクすぎるだろ、とは思ふけれど止まらないので許して欲しい。

厄介古参にだけはなりたくないし、再販してくれないからといって怒るつもりはないけれど……と思つていたらお兄さんがペットボトルケースにつけていたらしいキーホルダーを突然外し初めた。

価値があると聞いてしまつておくことにしたのかな、なんて思つていたら。

「じゃあ、あげるよ、これ」

「えっ!？」

思わず大きい声が出てしまつて慌てて口を抑える。お兄さんはおかしそうに吹き出しながら、外したキーホルダーを私に差し出してきた。

「オレよりお姉さんののが大事にしてくれると思うから。こういうのは、ちゃんと価値が分かる人が持ってた方がいいでしょ」

「そ、そそそ、そんな、あっお金……」

「いらないうらない。その代わり大事にして?」

「——っあ……、ありがとう、ございます……!」

手渡されたキーホルダーが輝いて見える。

ずつとずつと欲しかったものだ。

私は完全に舞い上がった。貰ったキーホルダーに傷がつかないよう、大切にしまひながら噛みしめる。

（まさかライブ直前でこんな最高のプレゼントがあるなんて……嬉しすぎる。夜行バスにしてよかったってことかな……）

舞い上がりきった私は、それからバスが出発して消灯の時間になるまで、ずっと。

お兄さんに、こしよこしよ話でLeoくんがいかにすごいかを語り続けてしまった。



side…玲央

ライブ直前になって前の予定が押しに押して、新幹線がもう無くなって。朝イチの新幹線で行けば良かったけれど、Tigaと一緒に取ったホテ

ルの部屋があるし、ファンの皆がどういふ感じでライブに行ってるのか気になって初めて夜行バスに乗ってみた。

（そんで、すげー可愛い子が隣でオレの話しまくってくれた、ってところまでは良かったんだけど……）

隣の子に、鞆の中に入れておいたはずのグッズに気付かれた瞬間は少し焦った。

ただしバレたわけではなく、ファンだと勘違いされたようだ。今まで顔出しなしで活動してきて顔バレもしてないし、囁き声だったから消灯時間まで誤魔化すことができた。

実際のファンの声を聞くことができて、しかもそれが可愛い女の子だったのは本当にラッキーだった——のだから。

（めっちゃくちや抱きつかれてんだよね、今）

首元にすうすうと寝息がかかる。消灯時間まで延々とオレ、というかLe

〇についての話をしていた彼女は消灯した途端スコンと寝落ちてもたれかかってきた。

そして十分後、寝返りを打つようにこちらを向いたかと思えば、突然しみついてきたのだ。

まるでオレの身体を抱き枕にするかのように。

(いくらなんでも心許しすぎじゃねえ……？　　って、寝顔かわい……)

無垢に眠る顔をちらりと覗いて後悔する。良くない気持ちで擡げてきたからだ。

——正直言って、歌い手活動を初めるまではそこそこ遊んできたほうだった。

活動を初めてから、ファンの子に手出しをしたらとんでもないことになるというのは知り合いの炎上を見て学んだので、それだけはしないように気をつけていたのだが——

(……いやいや。ダメでしょ)

忍び寄る邪念を振り払って小さく息を詰める。

聞こえていないだろうが囁き声で「ごめん、ちよつと触るね」と声をかけてから身体へしがみつく腕をつかみ、外そうとした。

「んん……やだ……」

「——……っちょ、……」

柔らかく持ち上げたのが仇になった。

むずがるような声と共に、逆に胸の中へと潜り込まれて意識が遠のく。いや、もうこれはほとんど絡み合ってる男女だって……。

（さつきまであんな、目えキラキラさせて喋ってた癖に……）

“お兄さんってゲーム配信から入った感じですよ？ 最近Tigakunとのユニットチャンネル初めたの知ってますか、そっちのホラーゲーム配信もよくって……”

“昔のアルバムではこの曲とかオススメかもです。Leoくんは昔だからって今より下手とかいうこと全然なくて、最初から完成されてて、いや今はもう超進化って感じなんですけど……”

適当に話を合わせていた結果、オレはこのコの中で「最近のゲーム配信からLeoに入った新規ファン」ということになったらしく、いろいろ教えてくれた。

当然だが全部知っている情報だ。内心ではホラーゲーム叫びすぎてうるさくなかったかとか、昔のアルバムは自分としては未熟だから恥ずかしいんだけどとか、色々思いながら聞いていたのだが。

(……今は、すげえ静か……)

胸の中で安心しきったように寝息を立てている小さな身体をぼんやり見つめる。

深呼吸を一つして、シャツを掴んでいる手をせめて外そうと、そっと掴んだ時だった。

「ん……れお、くん……」

小さな手にぎゅつと力強く手を握られて、狭いバス内で天を仰ぐ。

……いやいやいや。それは、キミが悪いでしょ。

内心で悪魔がそう囁いた瞬間、無意識のまま小さな身体を抱き寄せていた。

大丈夫。気付いたらすぐやめればいい。ちよつと驚かすだけ。抱きついてきたのはそっちの方。

「……ねえ。そんな無防備だと……イタズラ、しちゃうよ」

耳元で低く囁いた声は、届いてはいないようだった。



身体が暑い。

どうしてだろう、とぼんやり思いながらもまだ眠くて目が開かない。うとうとしたまま凭れていると、暖かな手にあちこちをゆっくり撫でられて、心地好いようなむずがゆいような気分になる。

(……？　なんだろう、これ……あれ、私……ベッドで、寝てるだけじゃ……)

家のベッドでいつも通り、ぬいぐるみの抱き枕を抱えて寝ているはずでは……と思った瞬間、ふにゅ……っ♡と胸を直接触られた。

それだけで背筋が戦慄く。いつの間にか服の中に侵入していた手がゆるゆると胸の脇を撫でて、擦ったいようなぞくぞくするような、変な感じが身体を襲った。

(なにこれ、ゆめ……？　私……えっちな夢、見ちゃってるのかな……)

するする……♡　ふにゅ♡　もにゅもにゅ♡

ぼんやりとした意識の中、暖かい手のひらで柔らかくおっぱいを撫でられる感覚だけが伝わってくる。脇の近くを辿られると思わずふう、と息が漏れてしまった。

（マッサージされてるみたいなのに、ぞわぞわもして……ちよつと、きもち、いい……♡）

すりすり♡ すりすり♡ と、可愛がるように膨らみを辿る手が乳輪のまわりを辿って、じわりと太ももに力がこもったところだった。

「ねえ、可愛いおっぱい……触られちゃってるけど、いいの？」
「……ッ……？♡」

熱っぽい掠れ声が耳に届く。どこか聞いたことがある気がしたけれど、よくわからなかった。

やたらとリアルな指先が焦らすように乳輪のまわりをこすこす♡ してきて、思わず回している腕に力を入れてしまう。

「あ、ビクッてした……ここ触られるの、恥ずかしい……？」

耳元で囁く声にまた身体がビクつく。

くす、と小さく聞こえた笑い声に力が抜けた瞬間、カリッ♡ と乳首を引つかかれた。

(っや……♡ なにこれ、ぞわぞわする……っ♡ ていうか声リアルすぎてやばい……なんでこんな夢見てるんだろ、恥ずかしい……ううっ、カリカリやだあ……♡)

すりすり♡ すりすり♡

カリカリ♡

いつの間にか両方の手が胸元に這っていて、両方の乳首を爪先で引つかれる。弱くて甘い刺激が襲ってきてたまらない。

私はぼんやりとしたまま、気付けば胸を突き出してしまっていた。

「……なにそれ、おっぱい触って触って♡　っっておねだりしてんの？
えっろ……」

「~~~~~っ♡　や、……っ♡」

「乳首も両方かたーくさせて……気持ちいいのに素直でイイコじゃん、お
ねーさん……♡」

鼓膜へ直接吹き込まれるような声にぞくぞくが止まらない。

ぷく……♡　と腫れるように主張してしまった先っぱを、指腹でいい子
いい子♡　するみたいに撫でられてどんどん息が荒くなっていく。

（だめ、これ、きもちいい……♡　先っぱじんじんしちゃうのに、優しくな
でなでされると余計腰うずいて……あっ♡　つまむの、やだあ……♡♡）

きゅ♡　こりこり、こりこりこり♡

つまめるほどに硬くなったそこを親指と人差し指で搓るように動かされ
て思わず腰が揺れる。

夢の中で私は、背の高いお兄さんの膝の上にいるようだった。動く度、お

兄さんの膝に内ももがこすれてしまうのが恥ずかしいけれど気持ちいい。

「こーら、あんまり動いちゃ駄目。オレの膝にまんこ擦り付けんの気持ちいいんだろうけど……」

「っ!？ んん……う………っ♡」

叱るようにきゅむっ♡ と乳首をつままれて慌てて身体に力を込める。

よくわからないけれど動いたら駄目みたいだ。言われた通りにしなきゃ、動いちゃダメ、動いちゃダメ……と言いつけられるほどにお腹に疼きが響いていく。

必死にはふはふと息を漏らして我慢していると、褒めるように先っぽをこりこり♡ 捏ねられた。

「ちゃんと我慢出来てるね。イイ子……」

「あ……♡ つ、ン……うう……♡」

「ね、ここだけ集中してて。今触られちゃってる、おっぱいの先っぽのトコ……」

ここだよ、って言うみたいにカリカリ♡　されて否が応でも意識してしまおう。

甘やかすように捏ねられて、どんどん息が早くなっていっていく。

(うう、きもちいい♡　乳首きもちいい♡　カリカリってされる度、腰、うずいて♡　お……おまんこの方に、じゅわあ……って、キちゃう……♡　うう、やだ、おまんこ擦りたい♡　ちよつとだけ、ちよつとだけなら……♡♡)

ぎゅつと目を瞑って、バレないようにって思いながらほんの少しお兄さんのお膝に腰を押し付ける。ずりゅ、ずりゅ、とゆっくり擦るのが気持ちよくてたまらない。

ぞくぞくとおなかに響く快感のまま、胸を突き出すフリをしておまんこを擦った。

「ねえ。まんこ擦んの駄目つつってんだけど」
「ッ！？♡　っや、……んうう……っ♡」

「我慢出来ねえの？　じゃあ抑えてっから。ちやーんと乳首、集中して」

バレバレだつて、みいたなため息と共に、大きな身体でがっしりと抱きしめるように腰を抑えられてしまった。動けない、やだ、どうしよう、と思っ
ているうちに胸元にふっと息がかかる。

少し身を屈めた気配がして不思議に思った瞬間、ちゅ……っ♡　と、乳首に柔らかいものが当たった。

（あ……♡　やだ、乳首、吸われてる……だめ、そんなに先っぽ舐めないでえ♡　ぞくぞく止まんない、気持ちよすぎて、集中するのつらいよお……♡♡）

「ん……乳首すげえ勃起してんね、コリコリじゃん……。先っぽちろちろ舐められんの好きそ……」

「~~~~っく、う……ふう……っ♡♡」

恥ずかしい言葉が聞こえてきて思わず喘ぎ声が漏れそうになってしまっ

た。必死に堪えようとしたとき、あれ？ とふと疑問に思う。

そういうえば私、どうして堪えてるんだっけ……。今、夢を見ているんじゃない？

そう思った瞬間——今まで、快感でずつとぼんやりしていた頭がふわりと浮上した。

(あ……あつ？ えっ？ まって、ここ、あれ？ ゆ、夢じゃない、ここ夜行バス……っあ♡ やだ、まって、すわないでっ♡♡)

勃起しきった乳首をぬるついた口内でちゅるる……っ♡ と吸われて、抑えつけられた身体がびくんっ♡ と跳ねる。

混乱したままなのに快感が止まらない。むしろ激しい刺激でより一層頭に火花が散っていく。

(うう、ちゅるちゅる吸うのダメ、きもちいい……♡ じゃ、じゃなくてっ！ まって、これ……と、隣のお兄さん？ あれ？ 今私、めっちゃお兄さんに抱きついてる……うそ、私、寝惚けて誘っちゃったの……？)

じわじわと状況を理解すればするほど熱が高まっていく。飛び退きたい気持ちにはなるけど抑えつけられているし、起きたのがバレてしまったらと思うとどうすることもできない。

そんな中でも乳首を吸われては片方もこすこす♡　されて、びくびくと揺れる身体が止まってくれない。

「ふ……身体跳ねてる。勝手に動いちやうのエロ……あー、もつとちゃんと抱きてえな、おねーさんのこと……」
「~~~~っ……うづ……っや……♡」

ぐるぐると喉奥から出ているような低い声がお腹に響いてたまらない。意識がはつきりしても既に高まった身体が止まってくれない。

せめて起きているのを気付かれないようにしないと……と思っていると突然、腰を抑えていたはずの手がスカートの中へと潜り込み、パンツのクロツチをつ~~~~……♡　と撫でた。

(あ♡ うそ、だめ、お、おまんこ、触られちゃってる……っ♡ どうしよ、ダメなのに、うう♡ 乳首触られすぎて……ぬるぬるなの、バレちゃう……っ♡♡)

見なくてもわかる。濡れているのを確かめるように、布越しにおまんこの筋へと指を潜り込ませて何度もなぞられている。

ぬちゅ♡ と音を立てて行き来されるのが恥ずかしくてたまらない。

「あーすっげ、トロトロ……クリも勃っちゃってんじゃん、おねーさん、感じやすいの？ それとも……」

「……っ、う……」

「こんなトコで痴漢されて、興奮しちゃった……？」

「っ！？♡♡ や……っ、う……っ♡♡」

すりすり♡ ぬりゅぬりゅ♡ こりこりこり♡

乳首と共におまんこも擦られて、低い声で囁かれて訳が分からなくなっていく。

腰元にたまっていた疼きがどんどん絶頂感に変わっていった。小刻みに震える身体に合わせるように動かされて、もう止めようがなかった。

（あ、ダメ、ダメ♡ これダメ、イク♡ イっちゃう、わ……私、こんな♡ バスで、えっちなことされて♡ だめなのに……っああダメ、乳首とクリ一緒にこすこすするののため、イっちゃ、うう……っ♡♡）

びくんっ♡

びく、ぶるぶるぶる……っ♡ かくかくかく……♡

イっている最中も乳首をちゅうう♡ と吸われ、おまんこをぎゅっと抑えられる♡

気持ち良すぎて快感が長引き、小刻みな震えが止まらない。そんな私を見たお兄さんが、ふ、っと笑った気配がした。

「……今いったよな？ かわいいーいき方……おまんこ触られんの気持ちよかったねえ、おねーさん」

「は、う……っん……ふ、うう……っ♡」

甘やかすように背中をとんとんされて一氣に力が抜ける。
思わずお兄さんの広い肩へと凭れると、お兄さんが笑ったまま、耳元に唇を寄せてきた。

「……ねえ。もう起きてるでしょ」

（中略）

——長らくのご乗車お疲れさまでした。終点、終点です。お忘れ物や落とし物などないませんように……—

アナウンスの声でがばりと飛び起きる。

外が明るい。気がついたらもう目的地に着こうとしていた。

「……………?!?!?」

「お。やっと起きた」

起きたとき、私はちゃんと自分の席に座っていた。寝惚けたまま状況を飲み込めずに辺りを見回していると、おはよ、と潜めた声ながら明るい調子で挨拶された。

顔を見て昨日のことを思い出した私は思わず大きな声を出しそうになって、慌てたお兄さんにシー、と口元に人差し指を当てられた。

「つ……………わ、私……………!」

「大きな声出しちやダメだって、バスなんだから。ほら、降りる準備しないともう着いちゃうよ」

「え、あつ……!!」

お兄さんは乗って来た格好そのままだけれど、私は靴も脱いでいたしタオルケットも出していた。

慌ててすぐに出来るよう身支度を整えながら寝る前のことを思い出す。脱がされた服は綺麗に整えられているけれど、身体はまだほんのりだるいし、こんな調子で話しかけられたことを思うと、あれはやはり夢ではなかったのだろう。

（うう、思い出すたび恥ずかしい記憶が……ていうかほんと、なんなの、この人……!!）

お兄さんの手でイカされたことを思い出してぼんつと顔が赤くなる。お兄さんはそんな私を見て、くつくつと肩を揺らしながら顔を近付けてきた。

「思い出した？ 寝る前のコト」

「~~~~なっ、んで……そんな……!」

「え、寝る前約束したのは思い出してねえ？ あー、っと……一回降りようか」

バスが着いてしまった。ざわめく車内と共にお兄さんが立ち上がる。

約束……約束なんて、しただろうか。起きる前のことを思い出そうとしたけれど霞がかかったように曖昧だ。今はとりあえず降りなければいけない。バスを降り、キャリーケースを下ろし終わってすぐ、お兄さんが楽しそうに近寄ってきた。

「溜奈ちゃん溜奈ちゃん。見てこれ、オレのズボンまだ濡れてんの、わかる？」

「!？」

にこりと笑ったお兄さんの指が指し示していたのはお兄さんのズボンだった。

ダボツとした、カジユアルながら質の良さそうなそのズボンに、くつきりと色が変わってしまっているところがある。

さあつと顔が青ざめた。

「——あ……これ、……わ、私……っ」

「なんで濡れてるか思い出した？ 起きたら濡らしてごめんなさいしてね、って言ったよね、オレ」

「あ……ごめ、ごめんなさい……」

「そういうコトじゃなくてさ」

握りしめていたスマホを指さされる。

相変わらず笑い方だけは優しく、どこか嘘みたいだ。

「瑠奈ちゃんのスマホのメッセアプリにオレのアカウント登録しといたから。ライブ終わったら連絡するから、絶対出て」

「はっ……？ な、なんで、わたしのスマホ——」

「パスワードわかりやすすぎだからね」

信じられない。確かにLeoくんの誕生日にしていたけれど、本当にこの人どうかしている。

そう思いながらふと、違和感が走った。

潜められた囁き声じゃない、このお兄さんの声は――

「その時に改めて、ごめんなさいして貰うから。瑠奈ちゃんいい子だから出来るよな？」

「なっ、な……そんな……ていうか、え、声、？ ……っ??？」

「あ、気付いた？」

楽しそうに笑うお兄さんから聞こえる、低いけれど通りの良い声。

聞き覚えしかない。バスに乗るまでずっとイヤフォン越しに聞こえてきたアーカイブ配信の声と、まったく同じ――。

「……ねえ、オレ、瑠奈ちゃんのコト絶対見つけるから。目、離すなよ」

——うそ。

愕然とする。そんなわけが。こんな人が、Leoくんのはずがない。そう思うのに私を見ておかしそうにお兄さんの笑い声は、いつも配信で聞いている通りのあの笑い声だ。

現状を受け止めきれずに立ち尽くしていると、駅の柱時計を見たお兄さんは慌てたように、じゃあまたライブでね——という言葉を残して、ひらひらと手を振って去ってしまった。

震える手でスマホを開く。

Leoくんの誕生日を入力してすぐ表示されていたのは、メッセージアブリの画面だった。

「可愛い瑠奈ちゃん撮つといたよ。ライブのあと、ちゃんとごめんなさいしに来てね」

Leoと記されている送り主からは、そんなメッセージと共に、あられない格好のままお兄さんの膝の上で眠る私の写真が残されていた。



重い厚底が一層重い。

ライブの帰り道。私は買ったL e oのグッズを握りしめながら、浮かない顔をしていた。

(ライブ……最高だった。けど……)

ライブは本当に良かった。

元々上手すぎる歌は完璧に仕上がっていたし、L e oくんのテンションも終始高く、サブライズゲストでT i g aくんも出てきて、ゲームもトークも盛りだくさんで本当に楽しかった。

いつも通り逆光で顔が見えないようになっていたけれど、声はもちろん体格も、うっすらとした髪型のシルエットも――

（本物だったんだ……それに、合図、送られた……）

Leoくんは歌の合間に客席を指差した。もちろんそれはパフォーマンスとしての一環で黄色い悲鳴と共に迎えられたけれど、一番目に指差した先は……私の方だった。

思い違いではない。絶対に私だった。見つけると言うあの言葉——たぶん私のスマホで席順を見たのだろう。

何も知らない私だったらその地点で卒倒していたくらいのファンサービスだ。

今だって、嬉しい気持ちはあるけれど。

「……あっ……？」

もやもやと考えていたら突然スマホが震え出した。

着信だった。Leoと表示されているスマホに思わず固まり——長い迷いのあとに、通話開始のタップをした。

「——あ、出てくれた、やった。ねえ瑠奈ちゃん、オレちゃんと見つけたでしょ」

「なっ、なっ……」

「あはは、びっくりした？」

「せ、せき……かつ、かつてに、すまほ……!」

「ああ、パス入れたらチケットのメール表示されてた画面だったからさ。あ、そんでこのあと駅の近くのブルータワーっていうホテル来て? 1806号室ね。こういう女の子が来たら通して、って言うてあるから」

「はっ……?」

「オレ待ってるからさ。ちやーんとごめんなさいしに来てね、瑠奈ちゃん」
「はっ? ちよ、ちよっと待つ——……うそ、切れてる……!」

一方的な会話と共に通話を切られてしまった。

ライブ後だからだろうか、少し上擦った声ではあるものの、お兄さん——いや、Leoくんの声はやっぱりどう考えても、推し初めてから一日たりとも欠かさず聞いているあの声だ。

（なんでバスに乗ってたの……？　そ、それになんで私にあんなこと、あと写真も……勝手すぎるし、こんなの、ほんとど脅しじゃん……！）

嬉しさよりも戸惑いと怒りが勝つてしまう。

それにLeo君は話しぶりも手つきも、どう考えても女慣れしている感じだ。

普段の配信から薄々はわかっていたことだし——正直そういうところも含めて好きだったけれど、本当にそうだったなんて。

（たぶん……こういうことしてるの、私だけじゃ、ないんだろうな……）

もつと他に気にすることがあるとは分かっているけれど、なぜかそれが気になってしまう。

ぐるぐる思考する頭を振って言われたホテルを検索した。

（と、とにかく一言文句を言って写真消してもらわなきゃ……あと一応、

ちゃんとズボン濡らしてごめんなさいも、しないと……。それだけ、それだけしたら、すぐ帰るんだから……！)

ぐつと決意をして、私は検索して出てきたホテルの方へと歩き出した。



「っ！？　ちよっ………も、なんで、こんな、んうう……っ！？♡」
「我慢すんなって。もうバスじゃないんだから。瑠奈ちゃんのかわいー声聞かせてよ」

私がバカだった。

謝るだけですむなんて、そんなはずがなかったのに。

ホテルのドアを通ってすぐ、整った顔を嬉しそうに緩めたLeoくんは――
頭を下げて謝ろうとする私に抱き上げ、お姫様抱っこでベッドへと連

れ去ってしまった。

「ご、ごめんなさい、するだけってえ、ひやうっ♡」

「うん、だからしてもらうって。なに、頭下げて謝れって言われるとか思ってた？」

広いベッドに降ろされてすぐに這いつくばって逃げようとしたものの、あつさり後ろから捕まえられてしまった。

ちゅ、ちゅ、と何度も首筋に吸い付かれては、胸元をやわやわ揉まれて引きつつた声が出る。

やっていることは強引なのに、触れる仕草はなぜか甘やかで混乱が止まらない。

「べ、べんしょう、弁償するから……っ」

「あはは、ほんとカワイイね。そんなことしなくていいよ、オレが欲しいの溜奈ちゃんだけだし」

ぱちんと音がする。誰に見せるわけでもないけれど、この日のために買った繊細なレースのブラジャーを他でもない、Leoくん本人に脱がされてしまった。

身体で払えということだろうか。あの時の続きをするのだろうか。想像して身体がぶるりと震える。

「ちよつと触っただけでもびくびく震えちゃうの、小動物みたい……。ていうかさ、オレ今日ずーっと瑠奈ちゃんのこと考えながら歌ってたんだけど、見てくれてた？」

「ッ！？ う、うそ……そんなつ、どうして、ひやうつ♡」

「嘘じゃねえって。ずっとペンラ振ってくれてたの、ちゃんと見えてたよ」

バスの時よりも興奮した声音なのはライブの後だからだろうか。

潜めた囁き声ではない、ずつとずつと好きだった声が直接耳元に吹き込んでくるのが無理すぎる。ほとんど脅されてここに来たようなものののに、口説くような口ぶりで訳がわからない。

胸元をなぞる手がブラを押し上げ、キャミソール越しに乳首を掠めて肩

が揺れた。

(うう、ダメ♡ 手やさしすぎて抵抗できない……♡ 布越しにすりすりするのやだ、昨日のこと、思い出して……先っぽ、膨らんできちやう……♡♡)

むくむく……♡ と硬くなってしまう先っぽの周りを、まるで焦らすようにゆるゆると撫でられてだんだん息が上がっていく。

このままじゃまた快感で訳がわからなくなる、そう思っただうにか逃げようとずり上がろうとした瞬間だった。

「逃げんなって。ライブどうだったか聞いてんだけど」

「ひい……っア！？♡ あ、やだ、まって、っやああ♡ ゆび、とめて、ンう♡」

「ダメ。このまま答えて」

かりかり♡ すりすり♡

カリカリカリッ♡

主張しはじめた突起を布越しに引っかかれて喉が引きつる。やだやだと身体を振るけれど大きな身体に閉じ込められるみたいに抱かれていて動けない。

やめてほしくて必死に口を開いた。

「ンうう~~~~♡ よ、よかったから、らいぶ、うた……アっ♡ か、かっこ、よかったからあ♡」

「それだけ？ バスではあんなに語ってくれたのに、言えなくなっちゃった？」

「おっ♡ うう、だって、いまは、あづ~~~~……っ♡♡」

すりすり♡ すりすり♡ コリコリコリ♡

昨日からどれほどいじられているのだろう。絶対に前よりも敏感になっ
てしまっている。堪えるように濁った声を出しているとLeoくんが興奮
したような吐息を漏らしていた。

「はー、エロい声かわいい……なに、今はなんで言えないの？」

「うう♡ ンツ♡ だって、今は……れ、れお、くん……っ♡」

「うん、オレに何？」

「あ♡ くん、う……ち、ちくび♡ ちくび、されてるからあ、あああ♡」

きゅっ♡ カリカリカリカリッ♡

おかしそうに吹き出したLeoくんは、それでも乳首をいじるのをやめてくれない。

綺麗に切り揃えられた爪先が布越しに先っぽを引っかかれる度、直接触られるのとは違う甘い快感が襲ってきて、ちつとも声が我慢できない。

「ふ……くくっ、そうだよね、今はオレに乳首されてるもんね。はー、ほんと、かわいい……」

「やっ♡ も、もお、ちくび、やめて、あうッ♡」

「ヤダ。てか思い出さねえ？ 昨日オレ、瑠奈ちゃんが寝てる間、ずーっとこうしてただけど……」

(うそ、しらない♡ そんなの知らないのにつ♡ 身体、勝手にぞくぞくして、とまらない……♡♡ 昨日、一時間くらいこうしてるって言ってたけど……ほんとに一時間も、こんな、今みたいに♡ 乳首、カリカリされちゃったの……っ?♡)

ぶつくりと膨れて硬くなっちゃったそこを可愛がるようによしよし♡ されて勝手に腰が揺らめいてしまう。動きに気付いたLeokくんが耳元でふつと笑うのにもビクついてしまっただけらしい。

「……思い出した? 昨日もそうやって腰ゆらゆらして、気持ちいい気持ちいい♡ つてしてたよね。でもダメ」

「ひゃうっ!♡♡ な、なに、やだあ、はなして……っ」

「瑠奈ちゃんは今オレに乳首されてんの。腰揺らして気持ちいいの逃がしたらダメだよ」

ぐっ♡ ぐっ♡ と腰に押し掛かれて下半身を抑えつけられてしまった。こんなことされたら苦しいはずなのに、高級そうなベッドのスプリング

が身体に沿うようしなって痛みも苦しさもない。

ただLeoくんの身体の中に密着するように閉じ込められただけだ。

もう逃げ場もなく、Leoくんに乳首をカリカリ♡ されて気持ち良さを受け止めることしかできなくなってしまった。

「っ♡♡ ひっ、ひ……♡♡ く、うう……なんで、っうん♡♡ 私……ただ、あっ、あやまりに、きた、だけで……っ」

「ああ、そうだったっけ……ダメだよ、オレまだ許してないから。もうちよつとこのままね」

「ッ!?! や、やだあ、ゆるして、ごめ、ああんっ♡♡ あっ?!♡♡ あっ、だ、めえ……っ♡♡」

いよいよキャミソールもずらされてしまった。暖かい手がゆるゆると乳輪のまわりをなぞって、すぐにぴんっ♡ と主張したそこを見つけてしまう。

身体を振る暇もなく、まるで乳搾りするみたいに摘まれて、抑えつけられた腰がビクついた。

「声あつま……瑠奈ちゃん、やっぱこういう方が好きでしょ。無理やり恥ずかしいコトされるくらいがイイんだ……?」

「ちがつ、あつ!?!♡ あうつ♡ や、やッ、さきつぽだめ、それだめッ♡♡」

「違う? じゃあ、無理やりされんのじゃなくて、ただ乳首摘まれながら先つぽほじられんのが好きなんだ……?」

「っ♡ ひっ、ひうう♡ ちが、ちがううっ、どっちも、ああンっ♡」

「ふ、そっかそっか。……どっちも好き、だよな?」

きゅ♡ きゅむっ♡ かりかり♡ こりこりこり……♡

どっちも好きじゃないのに。からかうような口調と共にぶら下がったおっぱいの先つぽをほじくられて目の前に火花が散る。

胸だけしか触られていないのにおなかの奥の疼きがどんどん大きくなつてきてしまった。

(やだやだ♡ 好きじゃないもん♡ こんな、無理やり抑えつけられるのもっ♡ 下品に乳首つままれて♡ ほじられるのも、好きじゃない、のに……)

…うう♡♡ ダメ、先っぽやさしく爪でカリカリされると、頭ぱちぱちして
…♡♡ なにも、考えられなく…♡♡♡

「…：なんか身体ぶるぶるしてきたね。瑠奈ちゃんって乳首されてるだけでイけんの？」

「ッ！？ ちが、あつ♡ いけないっ、したこと、な、っあ♡ あ♡ ひっばら、にやいで、っええ♡」

「ふーん…：したことないんだ…：そっか」

どこか浮足立った、独り言のような声音と共にきゅう~~~~っ♡ と少し強く摘まれて、尖ってしまった先っぽをコリコリ♡ コリコリ♡ 捏ねられる。

そんなことしたら伸びちやうのに、って力の入らない腕でシートを掴んで身を振るけれど、どこまでも器用に追いかけてくる指先からちっとも逃れられない。

「やめ、~~~~っ♡ うう…：も、ほんとに、れおくん♡ ちくび、伸びちや

うからあ……っ」

「え、いいじゃん。瑠奈ちゃんのコリコリのかわいい乳首、オレ専用のえっ
ろい長乳首にしよう？」

「っっ!?!♡ そんな、なんで……ぜ、ぜったい、だめ……ア!?!♡ これ、
あうっ♡ あんっ♡ やっ、これ、やあぁ~~~~……♡♡」

突然ぐっと胸板を支えられて背筋を伸ばされる。そのまままたきゅっ♡
きゅっ♡ と摘まれた。

というか、今……オレ専用の、長乳首にしようって、言われたような。どう
してだろうか。

これはLeoくんのズボンを汚してしまったことへのお詫び——お詫び
になっているかは疑問だけれど——なんじやなかったのだろうか。

疑問符が浮かぶ脳内をかき消すようにカリカリカリッ♡ と快感を送り
こまれて頭が弾ける。

(あ、ダメ♡ ダメこれ♡ おっぱいいじられてるだけなのにつ♡ おま
んこヒクヒクするの止まんない♡ きちやう♡ おっきいのきちやう、や

だ、やだやだやだあ……っ♡♡

「瑠奈ちゃん、……おい、瑠奈。逃げんな」

低い声。いつもイヤフォン越しに聞いていたはずの、あの煽るようなトーンの声。

直接鼓膜に吹き込まれるそれに、もう仰け反ったまま動けない。

この日のために推し色の、ワインレッドのネイルを施した指先から、容易く力が抜けていく。

「ひい……♡ ひ……っ♡ や、やつ、あ……イツ、はな、ひて、っああダメ、イク、ちくび♡ イク、いきゅっ……んううぐ~~~~っ♡♡」

ぶるぶるぶるっ♡ びくんっ♡ びく、びく……っ♡♡

ただ乳首を引っかかれていますだけなのに、突き抜けるような絶頂が襲ってきて魚のように身体が跳ねる。ぎゅっ♡ と閉じた内ももの奥のおまんこが何度もヒクつく。

「はは……じょーずに乳首でイクイクできたじゃん。呼び捨てされて興奮してんのかーわいい……」

「は、ふ……ううう……♡ うう、なんで、こんな……つあえ!？」

乳首だけでイっちゃった……とぐったりと身体をシーツに沈めた瞬間、身体を持ち上げられた。

あつという間に視界が反転して仰向けにされる。ベッドに来てから初めて見るLeoさんの整った顔は驚くくらいに熱っぽく上気して興奮しているようだった。なぜかぞくんと背筋が戦慄く。

「瑠奈ちゃんの初めて、全部オレに頂戴？」

さつきとは違う、甘い声音と一緒にブラジャーとお揃いのレースのパンツをするすると脱がされてしまう。

可愛い下着着てるね、って慣れたように囁かれてどこか心がもやもやした。というか私はただ謝って写真を消して貰うつもりだったのに、なんでこ

んなことに。

ぐるぐる考えているうちに、また腰を持ち上げられた。

「へっ？ あっ、あえっ？ あ、うそ、やだ、やだこれえ……っ」

「よ、つと。あー……やつと見れた。バスじゃ見えなかった、瑠奈ちゃんのぐつちよぐちよのまんこ……♡」

腰の下に枕を入れられて下半身を高く持ち上げられる。Leoくんに向かっておまんこを掲げるような体勢になってしまつて本当に恥ずかしい。

「やだ、やだっ、なんでこんな、ひやうっ♡ そこ、だめっ、撫でないで……！！♡」

「なんでって、昨日は見れなかったからだって。あー、瑠奈ちゃんのまんこ最前で見れんの最高……♡」

興奮した口調と共にぬちゅっ♡ と卑猥な音を立てておまんこの割れ目を撫でられる。

さつき乳首だけでイッたからだろうか、昨日よりも敏感に刺激を受け止めてしまつてつらいくらいだ。

「うあつ♡ あつ♡ やら、うう……なんで、こんな、わ、私……ちがうのに……！」

「何が違うの？ こんなまんこぐちよぐちよにする予定じゃなかったのに……？」

「ツ치가、ちがううつ♡ うう……私、あ、あやまつて、しゃしん、けしてもらいに、きたのにい……！」

必死に口にした途端、細めた瞳に射抜かれる。Leoくんはゆるりと首を傾け、ぬち♡ ぬち……♡ とまるで焦らすようにゆつくりと割れ目をなぞってきた。

なぜか肉食獣に狙われているような気持ちになって、ぶるりと身体が震える。

「あー……写真ね。そっか、あの写真消して欲しくて謝りに来たんだ、瑠奈

ちゃんは」

「そ、そう、だからっ……謝るからっ、弁償も……なんでも、するからっ♡
しやしん、けして、けしてくださ……あえっ？」

「なんかそれってさ、オレが脅してるみたいだよね」

屈み込んで低く呟くLeoくんにごくりと背筋が戦慄く。

みたい、じゃなくて脅しているのでは——そう思っていたら突然、ちゅ
うっ♡ とクリトリスに暖かな唇が触れた。

「おッ！？♡ なに、やつやだあ、すうの、やつ、あ~~~~っ♡♡」

「……なんでもするっつつたじゃん、じゃあオレにまんこ舐められていき
ながらごめんなさいしてよ」

なぜか苛立ったようなトーンで言われて訳が分からない。それなのに舌
先だけは丁寧にちろちろ♡ とクリトリスを舐めてきて、また快感が押し
寄せてくる。

（なんでもって、そういうことじゃないのに……っあ♡　だめ、乳首ずっとされてたせいで♡　もう硬くなってるクリ舐められちゃうのやだあ♡　ちゅうちゅう吸うのやめて、あ、あ♡　だめ、また気持ちよくなっちゃう……っ♡♡）

「ふうづ♡　うつ♡　つくう、んん……♡♡」

「ン……ふ、堪えてる声、子犬みたいで可愛い……。でも瑠奈ちゃん、今からごめんなさいイキするんだから堪えなくていいよ？」

「っ♡　そっ、んにゃの、できない、あうづっ♡」

「そ？　じゃあ、できるまで何回もイこっか」

ちゅ♡　ちゅう♡　れろれろれろ♡♡

平然とした言葉と共にクリトリスを舐め回されて快感が募るばかりだ。こんなの恥ずかしくて嫌なはずなのにおまんこからはとろとろと愛液が溢れて止まらない。

少し目線を向けると整った顔が見えて、それが推しのLeoくんだと改めて認識してしまつて、あまりに信じられない状況に足先までもが震えて

しまう。

「……なに、まんこ舐めてるオレのこと見て興奮してんの？ 変態♡」

「ッ！？ ち、ちがつ、アう……っ♡ も、むり、なめないで……ンジ〜〜♡♡」

れろれろ♡ ちゅうっ♡ ぬりゅぬりゅぬりゅ♡

皮のところに舌を差し入れられてクリトリスもその周りも余すところなく舐められて枕から腰が浮いていく。やだやだって首を振ってみせてもLeoくんは楽しそうに薄く笑うだけだ。

（これヤバいつ♡ すぐイっちゃう、さつきあんな、恥ずかしいイき方したばかりなのにっ♡ うう、にゆるにゆる先っぽに舌絡ませないで♡ にゅこにゅこ抜くのもやだあ♡ だめ、イクのため、がまん、がまん、がまん……っ♡♡）

「ふづ♡ ふづ♡ ううう〜〜……っんく、ううづ……っ♡」

「……ふ、くく、わかりやす……っ。いき癖ついちゃった？ 堪えんの大変だねー……♡」

「づ♡ うううっ、わ、わかってる、なら♡ くち、離して、あうづっ！？♡」

ぢゅぽっ♡ ぢゅぽ♡ れ~~~~っ♡

やだっと言うみたいになまた吸い付かれて裏筋から先端まで、ぬるぬるの舌で舐めあげられる。

おまんこの入口がひくひくと収縮する。追い上げられるばかりの身体が勝手にいく準備を初めてしまっていた。

「あ♡ あ♡ あっ♡ ダメこれ、ほんとに、またいつちゃう、からあっ♡ れおぐんっ♡」

「だからいきながらごめんなさいすれば許すつつってんじやん」

苛立ったような声音と一緒に追い上げるようににゆるにゆるにゆるっ♡とクリトリス全体に舌を絡ませられる。

飛びそうな意識を必死にかき集め、ほとんど涙ぐみながら叫んだ。

「あうっ♡ おっ♡ うっ、ごめ、ごめ、にやざっ♡ ば……バスの中で♡ れおくんの、だいじなお洋服♡ えっちな、おしおで、よごして♡ ごめ、んにや、さいい……っうあおっ~~~~♡♡」

言った瞬間、褒めるようにぢゅるる……っ♡♡ と激しく吸われてびくんっ♡ と腰が勝手に上がる♡
私はほとんどおまんこをLeoくんの口に押し付けるようにして、いつてしまった……♡♡

「ふ……じょーずに言えたじゃん、瑠奈ちゃん。言えなくても良かったのになー……」

「はっ、ふうっ、んん……、……♡」

余韻が長引く。ベッドサイドのウェットティッシュで口を拭いたLeoくんが身を寄せてきて、ちゅ、と額に口付けてきてうっかり力が抜けてし

まった。

怖くなったり甘くなったり、どこか不安定なLeoくんに翻弄されっぱなしだ。

目的を忘れないようにしなければ。

「れおくん、写真、……しやしん、けして……っ」

「……写真ね。はー、せっかく可愛く撮れてたのに……分かった、消していよ」

仕方なさそうな溜息をつきながら、Leoくんは近くにあったらしいスマホを取って私に差し出してきた。どうやら私にカメラロールを見られるのは構わないらしい。

私はのろのろと起き上がって、あられもない姿の写真を消し、削除された項目からも消し、メッセーシアプリの履歴からも消した。

「……ズボン、は……弁償します、から……」

「いいって、普通に洗濯すればいいだけだし。てかオレ、瑠奈ちゃん呼んだ

のは――」

「れお、くん」

「……んー？」

小さな声で呼んだからだろう。Leoくんは高い背を屈めて私を覗き込んできた。

私はようやく絶頂の余韻が抜けてきた身体を持ち上げて、Leoくんを見上げ、そして――

ぱしんと、彼の頬をはたいた。